

# 現代日本語における二格表現の衰微と交替

島 田 泰 子

## 0. はじめに

本稿では、若年層を中心として昨今頻繁に見られる格関係表示の混乱に着眼し、特に、二格表現に対する適格性判断が若年層において異なる<sup>\*1</sup>こと、若年層を中心とした今日的な表現に、二を用いずカラやデなどといった他の格助詞の使用を専らとする傾向があることに注目する。

従来の研究では、こういった複数の格助詞による表現が、交替可能な選択肢としてなんらかの意味的差異を担いつつ併存することを前提に、その使い分けの基準を論じるのが一般であった。これに対し本稿は、一部の用法において若年層に使用されなくなりつつある格助詞ニが、デやカラをはじめとする他の助詞に取って替わられる傾向を、既に知られる二格からヲ格への移行（「鑑みる」「言及する」など）や、「～ニ過ぎる／過ぎない」表現の衰退などとあわせて、全体的な動向として記述しようとするものである。

## 1. 格表示の混乱をめぐる現状

昨今蔓延する、格関係を示す表現の危うさについて、まずは具体例をいくつか挙げたい（用例末尾に添えた年・月は、用例の採集時期である）。

（1）授業内容で文法が詳しくやるみたいだったので。

（学生提出物、受講理由 2010.4）

- (2) 着ようとしたLサイズ水着が体に入らない

(地域ミニコミ誌・新刊紹介 2004.8)

- (3) 価値あるものだけをお客様に品揃えする (家電量販店ポスター 2008.12)

- (4) お薦め・焼酎と割ったらオシャレなカクテルに

(居酒屋メニュー 果汁飲料 2006.5)

- (5) ゆでた野菜と和えるだけ ごま和え用 (合わせ調味料 パッケージ 2012.12)

- (6) 乗馬をヒントに得たダイエットスポーツ器具が発売されている

(FM ラジオ 2008.6)

- (7) そよ風が君の髪をなびく (J-POP 歌詞 HY「11:00AM」)

仁田(1995)は、「格」とは静的・固定的なものではなく、ゆらぎ、うつりゆきといった連続性の中で捉えるべきものである、とし、その理由を「動詞と名詞(群)との組み合わせによって表される現実の事態が、極めて多様であるのに比して、動詞に対する名詞の関係のあり方を表示する形式が限定されてい」るためとする。しかし、上に示した(1)～(7)のような例は、併用可能な格マーカークラスにおける交替の現象とは、次元が異なる。

質的には、類似する動詞の格表示との混乱や混淆が推測されるなど誤用の域を出ないものもある<sup>\*2</sup>が、量的には臨時的・個別的な「うっかり」に留まるものでもないようで、蔓延の実態は等閑視できない。特に(2)(6)(7)のような格助詞同士の入れ替わりには、非ネイティブの学習者さながらの「日本語の未熟さ」に起因する混乱と表現の稚拙さが窺われ、ネイティブの日本語話者におけるこういった格表示の混乱は深刻である。事態における格関係の認識と理解は論理的思考を支える重要な根幹であるはずだが、そこに大きな変動が起こっているらしいことは、稿者が立場上若年層と日常的に接触・交流するなかで痛感することでもあり<sup>\*3</sup>、後に示すいくつかの先行研究(塩田(2006)(2012)、工藤(2012))などでも夙に指摘されるところである。

こういった背景を踏まえつつ、以下では、特に顕著な傾向の整理できそうな二格の表現を取り上げる。具体的な用例は、先に示したような日常的な観察によって得

られたものに加え、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ)から採集したものを適宜示すこととする。コーパスの「均衡」性ゆえデータに位相的な多様性を有するBCCWJには、インターネット上の質問掲示板などからも豊富なデータが収められていることから、規範意識による修正を経ない逸脱的な日本語表現の実例が得られやすい。このことは、格表示をめぐる今日的な混乱の実態や動向を観察しようとする本稿の目的に合致する。

## 2. 格助詞二の意味領域

二格の意味領域は広汎である。和氣(2000)は、

格助詞「に」は、それ自体では単一の意味役割を表示しない。その点で、二格はカラ格などの典型的な意味格とは性質が異なっており、二格を完全な意味格として扱うことは適当ではない。(p.89)

としたうえで、「二格名詞句は、構造格成分を取り巻くかたちで構文タイプを拡張的に規定する成分として機能」しており、「典型的な構造格成分のように動詞と組んで構文の骨格を作るのではなく、構造格成分と関係して副次的な構造を作ること、構造の型を拡張する」ものである、と指摘している。

同じ二格(の名詞句)が多くの意味役割を担うことは、言ってみれば、形式と意味との対応に緻密さを欠くことにつながる。若年層を中心とした今日的な二格の衰退(他の格助詞への移行)の現象は、この広汎すぎる意味領域それぞれが形式上の分化を目指して起こっているものと見ることもできよう。

和氣(1996)は、「に」を形態として持つ成分の機能を、①「単文中の構造格成分を表示する」もの、②「動詞の結果相を修飾する副詞的な成分を表示する」もの、③「受動文や使役文などの文法的ヴォイスに関連する二格名詞句に付く」もの、の3つに分類している。以下は、この分類に該当する二格表現のうち、若年層にとって助詞二の使用が古めかしい物言いとなってしまった(今日的には他の助詞を用いるのが一般的な)ものを取り上げ、移行先の助詞ごとに示すこととする。

### 3. 助詞デへの移行

二格表現の中には、格助詞デによる表現へ移行しつつあることが観察されるものがある。たとえば冒頭にも示した動詞「なびく」は、従来、

(7)' そよ風二君の髪ガなびく ((7)を改変し格表示を整えて示したもの)

のような構文を取るものであり、BCCWJからも(8)のような例が得られる。

(8) 実験白衣のような白いコートと長い髪が風になびいている。

(まぼろし曲馬団 新宿少年探偵団 太田忠司著 講談社 2005)

その一方で、BCCWJからはまた以下のような例も拾える。

(9) よく思えば男の子は髪が風でなびいてました。・・・雨ひどかったのに。

(Yahoo! 知恵袋 2005)

(10) 風で髪がなびき、木々の葉が揺れました。「ひどい嵐になりそうだ。

(魂への旅宇宙でさえもあなたの一部 マイケル・J. ローズ著 大亀安美訳 徳間書店 2005)

(9) はインターネット掲示板の書き込みであり、書き手の属性や素性等は一切不明ながら、前文脈の記述内容(とその日本語表現)から、旧来の規範に沿った日本語とは大いに隔たりを持つ日本語の使用者であることが看取される<sup>\*4</sup>。そのような位相性を有する例において二の代わりにデが用いられることは、動態としての日本語の先端的な姿を捉えたものとも言えるが、同時に、(10)のような刊行物においても同じく助詞デへの置き換わりが観察されることから、動詞「なびく」における二からデへの変化(移行)は、すでに相当進行していると見てよいだろう。

ところで、(7)'(8)の二は、和氣(1996)が、先の①「単文中の構造格成分を表示する」もののうち、「起因」と呼ぶものに該当する(それまでの先行研究で原因格の一種として扱われて来たものであるが、すべての原因格がデ／二交替を可能としないことから、両者は区別して扱われている)。

和氣(1996)は、次のような例を示した上で、以下のように述べる。

(11) 太郎が彼の変貌ぶりに／\*で驚いた。[起因] ※ 和氣(1996)の例(12)

(12) 花子が仕事に／で疲れた。

※ 同(14)

(13) 次郎が借金に／で苦しむ。 ※ 同 (15)

(14) A 氏がガン\*に／で死んだ。 [原因] ※ 同 (17)

典型的な「原因」の意味役割を持つデ格名詞句は、あくまで外的、第三者的な事象への参加の仕方しかできず、命題内部でガ格名詞句の主体と対立関係をとることはない。一方、「起因」の意味役割を持つ二格名詞句は、命題内部でガ格名詞句と対立する（「こと」としての）相手の役割を持つと同時に、ガ格名詞句に何らかの形で働きかけ、事象のなかに巻き込むものとしての役割も持っている。

例えば (12) の例は、「太郎」の側で「彼の変貌ぶり」を捉えて「驚く」という動作に及ぶと同時に、「彼の変貌ぶり」が「太郎」に対して「驚く」という体験を引き起こさせるという事象を表している。つまり、これらの文の「起因」の二格名詞句は、ガ格名詞句と対立し認知される「こと」としての役割を持つと同時に、ガ格名詞句に対する働きかけ性を持っているといえることができる。このことからすれば、(14) (15) の例でいわゆる原因格が二格・デ格いずれの形式でも表せるのは、それぞれの名詞句が、ガ格名詞句の対立者としての役割も、外的な事象への参加者としての役割もはたし得るからであるといえることができる。（p.62）

共時論的な立場からなされたこの記述については、通時的背景（に基づくニ・デそれぞれの位相性）に照らせば、さらに異論もあり得よう。なにより、「起因」か「原因」かという「意味役割」の判定基準が、例文における二格の適格性に置かれているのであれば、それはある種のトートロジーではないか、との疑問が残る。例えば (14) のように死を招くほどの影響を及ぼす「ガン」に「働きかけ性」が無いとすることへの違和感は、「太郎が彼の変貌ぶりを見て驚く」と同様に「A 氏がガンを患い死んだ」という関係が構築され得る（命題内部で「ガン」がガ格名詞句「A 氏」の対立者としての役割を果たし得る）ことによっても裏付けられよう。また、(12) においてニとデの両方が許容される理由を上（の引用）のように説くな

らば、同趣の例文 (12)'「人生ニ／\*デ 疲れた」における助詞の適格性の違いはどう説明され得るのか、といった問題もある。

通時的には、助詞デはニテの縮約で成立した、より今日的なものであるから、表現の新旧が雅俗に対応する、という要素も排除しきれまい。実際、BCCWJ のデータでは、「病<sup>やまい</sup>ニ倒れる」「(大統領が) 凶弾ニ倒れる」のような文語ふうの(雅語めいた)表現ではニが専ら使われており、一方「病<sup>やまい</sup>／過労／高血圧／脳卒中<sup>デ</sup> 倒れる」のように現実的な文脈や具体的な病名を伴う場合にはデが好まれる…という傾向が顕著である。少なくとも、今日、若年層が (7)' (8) のような二格に適格性を認めたがらずデの使用を専らとすることについては、従来のデ／ニ交替における原則とは異なる理由を考えなければならないだろう。

#### 4. 助詞ヲへの移行

助詞ヲへの移行が観察される代表的な例は、動詞「鑑みる」であろう。BCCWJ のデータでは、「～ニ鑑みる」が 803 例、「～ヲ鑑みる」が 58 例であった。コーパスのデータ上はいまだ少数派に見えるが、次の (15) (16) のような例は、書かれたものにおいてさえ今や容易に集められ、ましてや口頭においては、ヲ格を用いた表現がより頻繁に行われている。

(15) 東日本大震災に鑑み 花見の宴はご遠慮願います

(靖国神社境内・立て看板 2011.3 末 ※「に」部分は貼り紙。「を」を修正した模様)

(16) キャリアセンターでは、「就職活動等による授業欠席証明書」を発行いたします。これは、「公欠扱い」をお願いするものではありませんが、現在の厳しい就職状況を鑑み、特段のご配慮を賜りますよう、よろしく願いいたします。(稿者勤務先 キャリアセンター長名義の学内文書\*<sup>5</sup>)

ことばの誤用をただす新聞のコラムで、次の (17) のような記述が行われていることから、「鑑みる」におけるヲ格との共起は、相当一般化が進行していると言えよう。

## (17) 【現状を鑑みる】

正しくは「現状に鑑みる」だ。「鑑みる」は、もともと「鏡に映して見る」という意味で、「見る」だけなら「現状を見る」と言うのだから、「現状を鑑みる」と言いたくなるのも分かる。しかし、「鑑みる」は、ある事例に従って考えるという意味で、考える対象はその事例ではなく別の事柄だ。だから、「先例に従って」と言うのと同様に「先例に鑑みて」としなければならない。ここは「現状に鑑みて今後の方針を決める」のように言うべきところだ。（中日新聞「現代日本語百科」712 町田健執筆 2012.11.15）

動詞「言及する」においても、ヲ格使用への移行が進んでおり、(19) のような記述が見られる。ただし BCCWJ のデータでは、「～ニ言及する」443 例に対し「～ヲ言及する」はわずか 6 例であった。

- (18) 初場所中の泥酔暴行問題で日本相撲協会の武蔵川理事長（元横綱・三重ノ海）が 29 日、都内で「それなりのものが必要」と初めて処分を言及した。

（infoseek インターネットニュース・スポーツ欄 2010.1.30）

## (19) ytv アナウンサーズ 道浦俊彦 TIME

新・ことば事情 3717 「『～に言及』か？『～を言及』か？」

「ミヤネ屋」の N デスクからの質問です。『赤字国債発行の可能性』に『言及する』でしょうか、それとも「赤字国債発行の可能性『を』言及する」でしょうか？」

答えは「に」。

「に」は「赤字国債発行という事態にまで達する可能性に『言及＝言い及ぶ』」ので、「そこに至るまでの『過程』を含んだ言い方」になります。それに対して「を」は、単に「赤字国債発行の可能性」という「事象のみ」を指しているの、「そこに至る『過程』」は含まれていません。この場合、本当は赤字国債なんて発行したくないけど、仕方なくそうになってしまうかも、というニュアンスを表すのであるならば、「に」の方がいいでしょう。もしこ



れが、「指摘する」ならば、「を」です。「指摘する」の場合は、結果を指せば、それに過程が付随するからです。・・・というふうに答えました。

(2009,10,15) <http://www.ytv.co.jp/blog/announcers/michiura/2009/10/post-18.html>

ヲ格への移行は、動詞「暴行する」においても観察される。

(20) 87年12月27日に部屋の朝げいこ後に「ちゃんこがまずい」と立浪親方のおかみさんらを暴行し部屋を脱走。 ((18)の続き。2010.1.30)

(21) 【ダサすぎる不良列伝】

兵庫県赤穂市の中学生が小学生を暴行する動画を YouTube へアップして逮捕！

兵庫県赤穂市の中学3年の不良少年が公園で無抵抗の小学生を一方的に殴る蹴るの暴行を行っている携帯動画を YouTube にアップし兵庫県警に逮捕された。《略》暴行に関わったのは中学3年の男子生徒ら5人。同じ小学生への暴行行為が7月以降、5回ほどあり、その児童は市教委に「痛かった」などと話している。 (龍水の独言ブログ増刊号 2012-07-19

[http://d.hatena.ne.jp/youtube\\_girls/20120719/1342677798](http://d.hatena.ne.jp/youtube_girls/20120719/1342677798))

この動詞は、ヲ格を伴えば性的暴行の含意となり、それ以外の暴力行為の意味なら二格で表現されるものであったが、両者が形式上の区別を失ってヲ格に統合されつつあると見ることができる。BCCWJのデータからは、「～ニ暴行する」が47例得られ、「ヲ」は5例のみ、しかもその5例はいずれも「人ヲ暴行の容疑で逮捕」の類型で用いられたものであった。

ヲ格への移行の例として、最後に動詞「心掛ける」を挙げておく。

塩田(2012)は、動詞「心がける」における二格とヲ格を「どちらも正しい言い方」としたうえで、二格による表現を「支持しないという人が、少しずつ増えているようです。」としている。稿者が収集した(22)は、旧来の二格による用例で、いまや少数派となりつつある。BCCWJから得られた(23)は、例によってインターネット上の掲示板への書き込みである。先の(9)ほどではないにせよ、旧来の



用法や規範に照らしての校閲や添削などを経ることなく、入力された表現がそのまま公開されるこの手の資料には、やはり今日的な実態が反映されやすいと見られる。

(22) 体育館・卓球室 使用心得

《略》用具使用後は整理整とんに心掛けてください。

(四国 公共施設・貼り紙 2003.2)

(23) 少しずつスプーン、フォークに慣れていくものですよ。焦らず今は楽しい食事を心かけましょう。(出産／子育ての悩み Yahoo! 知恵袋 2005)

なお、塩田(2006)では、「お寺／神社 ニ 参拝する」の例文において、若年層ほど助詞ニを使わずヲを用いる傾向が示されており、また工藤(2012)は、「ニ配慮する」をヲ格で表現した事例の存在を指摘し、「不自然である」としている。これらの事例も、類例としてともに扱われるものであろう。

## 5. 助詞ガへの移行

ガ格への移行例として、「堪能だ」が挙げられる。BCCWJからは「ニ堪能(な／で)」78例に対し、「ニガ」が22例得られた。次の(24)(25)は、その一例である。

(24) やはり欧米の数カ国語にニ堪能だった南方熊楠も奇才の人でした。

(アスペルガーの子どもたち 親が知りたい、こんな時どうする? 井上敏明著 第三文明社 2004)

(25) また、国際交流事業に理解があり、語学がニたん能なボランティアの募集・登録を行い、その名簿を整備するとともに、

(福祉青少年白書 平成元年版 総務庁青少年対策本部 大蔵省印刷局 1990)

「ニ堪能だ」は、安(1997)にいう「contentsの二格構文」(「表情が喜びニあふれている」「経験ニ乏しい」など)につらなる系譜と考えられる。安(1997)には、動詞による「ニ満ちる／富む／すぐれる／たける／まみれる／欠ける」などの構文について、テイル形が自然で、状態性を表し、場所相当の意味を示すガ格との語順が固定される、などの特徴が記述されている。いわゆる形容動詞(ナ形容

詞)に当たる「堪能だ」はテイル形を持たない代わりにナ語尾の形で連体修飾に立つ点が特徴であるが、意味的にも同類とみなしてよかろう。

慣用的な表現とされて、安(1997)以前には十分な検討がなされなかったというこれらの表現が、改まった文章語におけるイディオマティックなものであることは、その歴史的背景に負うところが大きい。林(1999)は、「このような二格をとる言い回しがいつ頃から出現するようになったのか」について、古典文学作品における用例の調査を行っている。その結果、アフレル・厚イ・薄イにおけるこの構文は近代以降に限られるものの、欠ケルは近世期、<sup>とも</sup>乏シ・富ムは訓点資料や中世説話にまで遡って用例が得られることを明らかにしている。欠ケル・乏シイ・富ム・満チルが元々訓点語であったとされることから、その史的背景とそれ故の位相性が窺い知れよう。これらの構文が、今日的には若年層を中心として二格を取らなくなりつつあることは、やはり表現の世代差(新旧の問題)として捉えるべきであろうと考えられる。

## 6. 助詞カラへの移行

受け身表現の二格について、カラとの交替は盛んに観察される現象であるが、中にはやはり二格からの移行として捉え得る傾向が観察される。これらは、和氣(1996)の③「受動文や使役文などの文法的ヴォイスに関連する二格名詞句に付く」ものに該当する。

まずは「雇われる」の例を示したい。カラを用いた例のうち(28)は、視聴者参加型のテレビ番組で紹介された大喜利の投稿作品中に見えるもので、位相的には先の(9)(23)に近い。一方(29)は刊行物中に用いられたものである。

(26) シノブ＝クズハ隠密行動による暗殺を得意とする「シノビ」の少女。イルミナ軍に雇われ、主人公ファイゼルの命を狙うが、逆に倒されて任務失敗。

(コンプティーク 2005 年 1 月号(第 23 巻第 1 号、通巻 281 号) 角川書店 2005)

(27) 趣味は女子高校生の盗撮、結婚歴もなく定職もなく、今は夜間のビル清掃

会社に雇われている。（雨の匂い 樋口有介 著 中央公論新社 2003）

(28) お題：「泣けるか！」やたら乗客を泣かそうとする「お涙ちょうだい鉄道」  
ってどんなの？

視聴者の投稿作品：鉄道会社から雇われた不良がお年寄りに席を譲る

（NHK ケータイ大喜利 2012.11.10 O.A.）

(29) 出場者である御者は、馬と戦車の持ち主から雇われて出場するのが一般的であった。（ギリシアの古代オリンピック 楠見千鶴子著 講談社 2004）

砂川（1984）が示すとおり、受動文における二とカラの交替は、「～テモラウ」型の文や、「教わる」「借りる」「もらう」などの動詞を述語に持つ文と並んで観察される事象である。受動文においてカラが動作主のマーカースとして使えるのは、動詞が表す行為などの主体 A から行為などの相手 B に向かって移動ないし心的働きかけがあり、「起点・動作主」の項をとる（動作主であると同時に起点としても解釈できる）からである、と説明されている。また砂川（1984）は、受動文における二とカラの交換による意味の差異について、「二」を用いると「動作主と相手との間の空間的・心理的距離が捨象され、両者はより直接的な関係において捉えられる」が、カラが用いられると「両者の間に距離が意識されるようになる」、としている。

しかし上記（26）～（29）における助詞使用の傾向は、必ずしもこれに当たらない。これらの例については、また別の説明が必要となろう。

砂川（1984）は、「世界中から注目されている」「政府から調査を依頼された」のような例において二よりもカラが用いられるのが普通であることを、以下のような理由で説明する。

「世界中」や「政府」のような、「場所性」の意味合いを持つ名詞の場合、「起点」意識の方が前面に出てしまうからである。これらの名詞が複数の人間から成る集団を表しており、そのために「動作主」を特定しにくいという事情によるためであろう。注目や依頼をするのはその集団に属する誰かであって、集団そのものが直接にその行為を行うのではないからである。ここでは、「動

作主」が背後に隠れ、そのために、動詞の表す行為の能動性も意識されにくくなっている。(p.77)

先の(26)～(29)は、やはりこれに該当しない。(29)における「戦車と馬車の持ち主」は集団ではなく個人であろうから、動作主の特定に困難はなく、むしろカラよりニがふさわしいはずである。逆に「軍」や「会社」という集団に雇われる(26)(27)は、砂川(1984)の理論に従えば、むしろニではなくカラが使われてよいはずであろう。

BCCWJのデータでは、「～ニ雇われる」145例に対し「～カラ雇われる」3例と、圧倒的な差が見られた。カラを使用した用例の、(29)以外の2例における雇い主は、「地元」「王さん」で、集団と個人の両様があり、ここにも砂川(1984)の論理とは異なる原理が働いているように見受けられる。「従来のニから、新世代のカラへの移行」という傾向は看取されないだろうか。(28)におけるカラ使用も、(砂川(1984)の説明に一見合致するかに見えるが、反例となる次の(30)とともに)世代間の新旧の差の問題として捉えるべきかもしれない。

(30) 日経 Biz「職場を生き抜け！」【第201回】

部下から雇われて年収3千万円をもらっている人

(前文脈・略)私を感じるのは、40～50代でリストラで辞めていかざるを得ない行員は、かつての部下のお世話になるケースが少なくないこと。以前の部下が自分よりも早く転職し、その会社で人事権を握っているから、雇用の面倒をみてもらえるようです。中には、部下から雇われて年収3千万円を受け取っている人もいます。大手銀行の行員間のつながりがいかに強いかを物語っているように思います。

(<http://www.nikkeibp.co.jp/article/column/20121023/327822/?ST=career&P=2>)

ただし、(28)～(30)はいずれも、組織(鉄道会社)や個人(馬と戦車の持ち主、元部下)の別なく、それらの存在から狙い撃ち的にスカウトを受け(て雇われ)る、という「起点」性が、文脈から認められる。石田(2006)によれば、ニ／カラ／ニヨッテの三者はそれぞれ下図のような意味制限を有し、このうち、原因

者化と起点化に関しては（ともに脱行為者化という降格のありようとして）「不完全ながらも相補的な分布を構成する」という。

（表 1）動詞外項の降格と意味論的な制限

外項の出現様式	意味的制限	降格の意味的特徴
外項なし	+	行為の背景化による行為者削除
によって	+	行為者の原因者化
から	+	行為者の起点化
に	－	（デフォルトの $\theta$ 役割で具現）

雇用者から被雇用者への積極的なスカウトによって雇用関係が結ばれる事例においては、たしかに砂川（1984）にいう「動詞が表す行為などの主体 A から行為などの相手 B に向かって移動ないし心的働きかけ」が発生するのであろう。

なお、動詞「追う」に関しても、「（逃亡者が）追っ手や組織 ニ／カラ 追われる」という構文\*<sup>6</sup>において、BCCWJ からニ 169 例、カラ 10 例が得られ、「雇う」と同様の傾向となった。

森（1997）が行ったアンケート調査\*<sup>7</sup>では、ニの使用が期待される以下のような例文に対しても、○（日本語として全く問題ない）や△（違和感は覚えるが使えるくもない）とする回答が寄せられている。15 年以上も前の調査であるが、地域差などの要素を排除しきれないにしても（あるいは地域差に由来する世代差の動向として）、受動文におけるニからカラへのマーカー移行は、夙に進行しつつあったと見てよいだろう。

（31）旅人は、盗賊から金を奪われた。

茨城大 20 名中 ○ 12 △ 2 × 6、明海大 60 名中 ○ 33 △ 14 × 13

（32）私は彼からアイデアを盗まれた。

茨城大 20 名中 ○ 10 △ 2 × 8、明海大 60 名中 ○ 33 △ 7 × 20

(33) 僕は、彼から影響されて囲碁を始めた。

茨城大 20 名中 ○ 9 △ 5 × 6、明海大 60 名中 ○ 18 △ 28 × 14

## 7. 助詞トへの移行

動詞「割る」「和える」は、それぞれ「高濃度の液体 A を 希釈用の液体 B で 割る」「主たる食材 A を 調味料（相当の食材）B で 和える」という構文で用いるものであるが、冒頭に示した (4) (5) のような助詞トの使用については、誤用の域を脱して既に一定の定着が見られ、ある種の用法変化として捉え扱うべきと考えられる。BCCWJ のデータからは、「～デ割る」607 例に対し「～ト割る」が 4 例\*<sup>8</sup>、「～デ和える」139 例に対して「～ト和える」52 例、「～ニ和える」17 例が得られた。「割る」「和える」は、「混ぜる」との形式的・意味的弁別を失いつつあるかに見られる。

助詞トへの移行の類例としては、なお「～ニ合う」「～ニ同じ」などが挙げられよう。前者については「ミルクとよく合います」（紅茶パッケージ）のような用例がしばしば見られ、後者については、「右に同じ」「先の例に同じ」などといった文語調の表現が文章語としてなお使用されるものの、口頭においてはトへ移行しつつあることが観察される。

## 8. 無助詞への移行（複合動詞化）、複合助詞への拡張

二格表現を他の助詞による表現への移行という観点から観察する時、あわせて扱いたいものがある。なお存在する。「～ニ過ぎる」は、否定の形式を取る「～ニ過ぎない」とともに、今日的には衰退しつつあると見てよいだろう。

肯定形「～ニ過ぎる」のほうは、「～ $\phi$ 過ぎる」と複合動詞化することによって、結果として二格表現ではなくなる方向へと進んでいる。次の (34) (35) は形容詞の例であるが、（非音便形による、連体形由来の準体法を二格名詞に用いる、とい

う語形上の印象も作用して) 文語調めいた位相的特徴を持つ文章語であり、今日的な口頭での表現として用いられるのは、語幹を用いた複合動詞としての「遅すぎた就職」「低すぎるのでは」などであろう。

(34) 岩伍も総領息子の遅きに過ぎた就職に安堵しているそうであった。

(仁淀川 宮尾登美子著 新潮社 2000)

(35) しかし、立法論になるが十五歳という年齢はいささか低きに過ぎるのではないか、せめて十八歳以上程度とすべきではないか

(相続と相続税の実例相談 200 選 田中章介, 田中将共著 清文社 2004)

「短絡的二過ぎる」「卑屈二過ぎる」「性急二過ぎる」「寛容二過ぎる」などといった(漢語系の)形容動詞においても、事情は同様である。これらの表現において二格の使用が衰退したのは、「食べ過ぎる」「言い過ぎる」などといった動詞における複合動詞と形式上の統合がなされた<sup>\*9</sup>ことによると考えられる。

一方、否定の形式を取る「二過ぎない」は、「わずか二だけである」「二するのみである」の意に解されがたいためか、(36) (37) のような、助詞「しか」を挿入した「二しか過ぎない」という表現の出現を招いた。

(36) 町の支出分は千四百二十七万円支出をしている。ところが交付税措置されているのはそのうち五百四十万にしかすぎない。

(国会会議録 参議院/その他/予算委員会 第三分科会 第 080 回国会 1977)

(37) 初めて原作を読んだ時、映画が序章にしかすぎないことを知りました。

《略》映画しか観たことのない人に、ぜひ読んでほしい一冊です。

(アニメ『ナウシカ』原作漫画 新聞広告 2010.4.16 読売新聞掲載分)

茂木(2001)によれば、明治から昭和初期にかけての資料にも「二にしか過ぎない」が見られるとのことであるが、BCCWJ のデータでは、「二過ぎない」1253 例に対して、「二しか過ぎない」128 例は、いまだ少数派に留まるようである<sup>\*10</sup>。

歴史的に遡れば、動詞「過ぎる」が、程度的にある基準(となるものごと)を「上回る」ことを表す場合には、二格を伴って次の(38) (39) のように用いられ



た。「～二過ぎず」は、形式的にも意味的にもその否定であり、後の(40)(41)は「上回らない」「上回るものではない」の意に解釈される。

(38) 人にうたがはれぬるに過ぎたる恥<sup>はぢ</sup>こそなけれ。(平家物語 巻五・咸陽宮)

(39) 木の葉のおつるも、《略》下よりきざしつはるに堪(へ)ずして落(つ)るなり。迎<sup>むか</sup>ふる氣、下に設<sup>もう</sup>けたる故に、待<sup>ま</sup>ちとるついで甚(だ)はやし。

生・老・病・死の移<sup>きた</sup>(り)來たる事、またこれに過(ぎ)たり。

(徒然草 一五五段)

(40) 定<sup>さだ</sup>めて討<sup>う</sup>ち死<sup>じ</sup>につかまつるべし、老<sup>ろ</sup>後<sup>お</sup>の思<sup>おも</sup>ひ出<sup>で</sup>これに過<sup>め</sup>ぎじ、ご免<sup>めん</sup>あれと望<sup>のぞ</sup>みしかば、赤<sup>あか</sup>地<sup>じ</sup>の錦<sup>にしき</sup>の、直<sup>ひた</sup>垂<sup>たれ</sup>を下<sup>くだ</sup>し賜<sup>たま</sup>はりぬ。(世阿弥の能「実盛」)

(41) 形はさながら老人めけども、顔<sup>がん</sup>色<sup>しよく</sup>は玉のごとく、年<sup>とし</sup>の頃<sup>ころ</sup>三十歳に過(ぎ)ず、髪<sup>かみ</sup>黒く髭<sup>ひげ</sup>長く、目の中さわやかにして、(風流志道軒伝 巻一)

(38)は「恥」の度合い、(39)は「はやさ」が、それぞれ「人に疑われること」や「自然界の移り変わり」を上回ることを意味する。(40)は、実盛が主君宗盛に向かい最後の晴れ姿として錦を着ることについて許可を求める場面での用例で、思い残すこととしてこれを上回るものはないと訴えるものであり、(41)は人物描写の中で、年齢が三十歳を上回らないと述べるものである。

ただし、(40)(41)いずれも、今日的な「たったこれだけ」「わずか三十歳」などといった量の小さいこと・程度のささやかであることを含意する傾向は、すでに見て取れることから、否定形「～二過ぎない」それじたいは、古典語においてもさほど今日と大きく異なるものではない。近世期以前と近代以降とで大きく変化したのは、やはり肯定形「～二過ぎる」のほうであったと考えられる。

肯定形が複合動詞へと移行して衰退することと、「～二過ぎない」が肯定形の単純な否定ではなくなった(形式上の〈肯定－否定の対〉が、そのまま意味上の〈肯定－否定の対〉をなすものではなくなった)こととの先後関係は、不明である(むしろ循環的な相互作用があったのだろう)。しかし、少なくとも、古典語における動詞「過ぎる」が、「上回る」の意味を持つこと<sup>\*11</sup>と二格を伴うことの2点について近代以降に変容を来し、それがために「～二過ぎる」における〈肯定－否定の

対〉が崩れたことは、大局的な二格表現の衰微の一環とみなしてよいと考えられる。

## 9. 二格を用いた表現そのものの消滅

前節に記述した「～二過ぎる」(肯定形)における二格表現の変容と衰微は、本稿が前半に扱った他の二格をめぐる事例に比べると、時期的にはかなり早い現象である。ただし、日本語の歴史において、二格が担っていた広汎な表現は、さらに長い年月をかけて衰退の途をたどってきたと見られる。ひとつ目には、次のような連用修飾句における二格が指摘できる。

(42) むすびあげたるたゝりの、すだれのつまより、几帳のほころびに、すきて見えければ、「そのこと」と、心えて、「わがなみだをば、玉にぬかなん」と、うちずし給へる (源氏物語 総角)

(43) 賀茂へまゐる道に、田植うとて、女の、新しき折敷<sup>をしき</sup>のやうなるものを笠に着て、いと多う立ちて唄をうたふ (枕草子 二二六段 [三卷本] 賀茂へまゐる道)

(44) 追剥を弟子に剃りけり秋の旅 (蕪村句集・下 天明四 [1784] 年)

(45) 浅鍋売：いかに持ち持ちでも、この浅鍋を棒には振られますまい。《略》それならばぜひに及びませぬ。浅鍋を棒に振りましょう。目代：それがよからう。〔浅鍋売、浅鍋を棒に振る〕浅鍋売：アア、あぶないあぶない。

(脇狂言・鍋八撥)

古典語におけるこれらの二格は、和氣(1996)にいう②「動詞の結果相を修飾する副詞的な成分を表示する」ものの一種として理解される。その一方で、村木(1991)にいう〈資格〉の二句に連なる系譜と目されるものでもある。「笠二着る」における「着る」については、着用を表す意味が、馬(1997)が挙げたトシテと交替可能なニが使われる述語動詞のうち、「使う」「用いる」の類に相当すると見られる。「玉二貫く」については、和氣(2006)による分類と整理が参考になる。

和氣(2006)は、〈資格〉の二句を、「位置変化に伴う資格付け」(用いられる動

詞の一例：送る・やる・迎える、渡す・もらう・与える）、「叙任」（立てる・命じる・任じる・推薦する・据える・選ぶ）、「仕立て」（充てる・仕立てる・見立てる）、「臨時的な利用」（使う・利用する）の4種に分類している。(42)のような「玉ニ貫く」は、涙を玉（璧）として「臨時的」に「見立て」て、また「仕立て」るものである。いずれも比喩的な側面を有する点で「見立て」の要素が強い。これらが古代語においてどこまで修辭的な表現としての特殊性を持っていたのか、逆に、他の二格名詞句との体系的な位置づけがどのように記述され得るのか、さらなる検討が必要であろう。

日本語の歴史上、早々と衰退した二格表現の例として、ふたつ目に取り上げたいのは、「足モあがかニ」「枝モたわわニ」「根モころごろニ」「ひねモすがらニ」などの連用修飾表現である。これらは、従属節相当の中に、①主格相当の名詞（ただし助詞モでマークされる）、②情態言としてのア列音（またはその交替形としてのオ列乙類相当音）語尾を持つ、（またはその重複形を取る）動詞由来の語、③助詞ニ、の3つを備えて主節の述語に対し連用修飾を行う副詞的な定型表現であるが、語形を変化させ形骸化したかたちで残ったり、表現じたいが消失したりして、今日的には類型としてすっかり衰退した<sup>\*12</sup>。語源未詳とされる「けんモほろろニ」なども場合によってはこの類型の一例と見るべきかもしれないが、いずれにせよこの類型がなぜ現代語に受け継がれなかったかについては、二格表現全体の動向と関連づけて考察されるべきであろう。

## 10. おわりに

以上、本稿では、いくつかの二格表現において見られる他の助詞との交替・移行という今日的な傾向を、日本語における二格の大局的な衰微と関連づけて、全体的な動向として捉え記述しようと試みた。本稿の冒頭から前半において示したとおり、昨今盛んに観察される（若年層を中心とした）格表示の混乱の事例も、その一部については、かつては相当多様であった「二格による連用」が次第に衰退していく

過程の末端に位置付けられるのではないだろうか。通時的な経緯によって慣用的に残る伝統的な表現類型も含めた、二格表現全体の衰微の流れを明らかにすることが、今後の課題として掲げられる<sup>\*13</sup>。

最後になおひとつ言い添えたい。英語では次のように表現することが可能な結果構文が、日本語にはそのまま直訳できない、といった対比が行われることがある<sup>\*14</sup>。

(46) \*靴をぼろぼろに走った ←→ He ran his Nikes threadbare.

(47) \*一升瓶を空っぽに飲んだ ←→ He drank the bottle dry.

(46) (47) はいずれも、古代日本語ふうには「靴モぼろろニ走る」「瓶モかららニ飲み干す」式の表現が行われ得たものである。連用表現じたいの歴史的な変遷を明らかにするという課題は、対照言語学的な観点からも、興味深く、考察に値するものとなる可能性があるろう。

#### 注

- \* 1 若年層の格助詞使用に対する適格性判断の観察は、稿者が勤務先の大学等で日常的に関わり合いを持つ学部生・院生や、(俗に「出前授業」と言われる)高校での出張講義の受講生らに対して行った、例文を示しての問いかけを通じた確認作業に基づく。
- \* 2 (3)は「提供する」、(4) (5)は「混ぜる」、(6)はヒントに「した」、などにおける格表示に一致する。
- \* 3 格表示の混乱は、学力など知的水準の問題と深く関連するものでもあり、一定量の読書をはじめとする習慣的な知的鍛錬によって十分な日本語運用能力を持つ日本語話者にはこの手の混乱は起こりにくいものとの見方もあるが、特に昨今の動向に関しては、必ずしもそうではないことを注記しておきたい。
- \* 4 インターネット上での原文は、以下のurlのリンク先にある。  
[http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q135224213](http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q135224213)  
 一読して、「私ϕ声が出ませんでした」「雨ϕひどかった」における主格表示の省略など、きわめて口語性の高い文体で綴られたものであることが知られる。また、単に口頭語的である以上に、「よく言えば」の未熟さ(あとになって振り返る意味では、言うまでもなく、動詞「考える」の使用が一般的)、三点リーダー(…)を中黒(・)で代用する習慣(しかも中黒は3字ではなく4字分を使用)などから、ある層における日本語の実態を如実に反映する例とみてよいだろう。
- \* 5 稿者の出席する教授会でも、「本学の実情を鑑みて……」などといった発言はしばしば聴かれる。高齢層の学部構成員による、それなりに公的な場での改まった発言でさえ、助詞の移行もしくは交替が相当進行していることは、興味深い事実である。
- \* 6 「追い出される」「追い払われる」の意味での「国を追われる」などの例は、除外した。
- \* 7 1996年2月に、茨城大学人文学部2～4年生ならびに明海大学外国語学部1年生(どちらも関東地方出身者に限定)を対象に実施されたもの。
- \* 8 出典としては、雑誌記事の他に、ブログやYahoo知恵袋といった先の(9) (23) (28)に近いものであった。
- \* 9 両者は形式上は統合されたが、意味上は異なりを持つ。山川(2000)は、「～すぎる」の意味を二種類に分類し、「動詞+すぎる」が“過剰相”であるのに対し、「形容詞+すぎる」は“強意相”であるとし

ている。

- \*10 さらに、「～だけ二過ぎない」40例、「～マデニ過ぎない」3例、といった例も見られる。これらも、「～ニしか過ぎない」の類例と見なし得るものであろう。
- \*11 古典語における動詞「過ぎる」が、「上回る」の意味を持っていたことを考え合わせれば、漢語系形容動詞、例えば「卑屈二過ぎる」などが「あまりに卑屈である」（客観的な量としての過剰さ）の意味ではなく、「卑屈というには、それを上回っている」「卑屈と呼べる水準を超えている」という（事態を認めたいとし、そのように述べる、モダリティ寄りの）意味であったことが諒解される。先に注9に引用した山川（2000）が、「動詞＋すぎる」を「ある出来事・命題に対する叙述」とする一方で、「（～二過ぎる）」の展開としての「形容詞＋すぎる」を「ある個体に対する叙述」である、とする見解は、これと一致する。
- \*12 「枝もたわわニ」は、「枝（従属節中の主格相当）ガ」「たわむ（従属節中の述語相当）」ほどニ「実（主節の主格）ガ」「なる（主節の述語）」様子を表す語であるが、現代語には、「枝」を落として「実ガたわわニなる」のような用いられ方がかつつが残存する。「根もころごろニ」は「ねもころに」を経て「ねんごろに」と変化し、「ひねもすがらニ」は「ひねもす」と変化した。
- \*13 工藤（2012）では、動詞「恋ふ」「おそる」「好く」における二格からヲ格への移行についても触れられている。これらのうち「恋ふ」は早く上代から平安期にかけて、「好く」は中世以降、それぞれ変容を来したとされる。また、高齢層による証言として、動詞「培う」における二格からヲ格への移行（に伴う、適格性判断の世代差）を目の当たりにした当事者の回想的逸話も得られた（補注参照）。これらの事例を含め、日本語における超長期的な二格表現衰退の動向については、さらなる究明が待たれるが、いずれも連用表現の大局的な消長との関わりという点で興味が持たれる。
- \*14 ともに影山太郎による動詞（の日英比較）研究において示されたもの。（46）は『動詞意味論 一言語と認知の接点』（くろしお出版、1996）、（47）は『概念構造の拡充パターンと有界性』（『日本語文法』2-2、2002）に、それぞれ基づく。

#### 補注

田中章夫先生（1932年東京生）より、若き日の思い出として、以下の逸話につきご教示を得た。亀井孝先生（論文か何か）を、弟子たちが手分けして校正した折に、文中にあった動詞「培ふ」の二格をヲ格に修正したところ、亀井先生より、「花ニ土飼ふ」「馬ニ水飼ふ」というのが正用であって原稿の当該部分も二格でよい、と叱られたことがあった、とのことである。（電話により直接の叱責を受けたのは若き日の小松英雄先生であり、田中先生は小松先生より後日伝え聞いたとのことであるが、亀井先生は類例として「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」の冒頭「國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ…」を引き合いに出して説明された由。）

#### 参考文献

- 安 平 篤（1997）contents の二格構文をめぐって（『筑波日本語研究』2）
- 石田 尊（2006）受動文における動詞外項の降格について—日本語の受動化の多様性—  
（『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』ひつじ書房）
- 工藤 力男（2012）『日本語に関する十二章—詫びる？詫びない？日本人—』（和泉書院）
- 塩田 雄大（2006）インターネットを用いた言語調査の一試論  
—公開型 web 調査の結果から—（『NHK 放送文化研究所年報 2006』）
- 塩田 雄大（2012）「節電に心がける」？「節電を心がける」？  
（NHK 放送文化研究所 web サイト「最近気になる放送用語」2012.06.01）  
<http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/152.html>
- 砂川有里子（1984）「ニ」と「カラ」の使い分けと動詞の意味構造について  
（大阪外国語大学研究留学生別科『日本語・日本文化』12）
- 仁田 義雄（1995）格のゆらぎ（『言語』24-11 特集・助詞の文法）
- 林 謙太郎（1999）「レモンはビタミンCに富む」という表現をめぐって（『近代語研究 第十集』）
- 村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』（ひつじ書房）
- 馬 小兵（1997）「立場・資格」を表す「として」の用法について

- 「に・で」との比較を中心に—（『筑波日本語研究』2）
- 茂木 俊伸（2001）「にしか過ぎない」考（『筑波応用言語学研究』8）
- 森 雄一（1997）受動文の動作主マーカーとして用いられるカラについて  
（『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』30）
- 和氣 愛仁（1996）「に」の機能（『筑波日本語研究』1）
- 和氣 愛仁（2000）二格名詞句の意味解釈を支える構造的原理（『日本語科学』7）
- 和氣 愛仁（2006）〈資格〉の二句について  
（『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』ひつじ書房）
- 山川 太（2000）複合動詞「～すぎる」について  
（大阪外国語大学研究留学生別科『日本語・日本文化』26）

[付記]

本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」（代表者・新野直哉）の成果の一部であり、2012年12月に行ったプロジェクト研究発表会での口頭発表「現代日本語における二格表現の衰微と交替 —広義の“新用法”研究の一端として—」に加筆修正を加えて稿を成したものである。研究発表の席上、参会の諸氏より有益な意見や情報（補注に示した「培う」にまつわる逸話に関するご教示を含む）を賜った。記して謝意を表したい。

